聖霊降臨日　　わたしたちの言葉で　　２０２３．５．２８．

イースターから、５０日過ぎて、今日は聖霊降臨日です。ユダヤ人たちには、３つの大きな祭りがありました。ひとつは、過ぎ越しの祭り。これは、種入れぬパンの祭りとも言いました。ユダヤの遊牧生活をしている人々が、冬の牧草地から、夏の牧草地へ移る時、出発の前の晩に、悪魔が襲ってくるのを防ぐため、犠牲の羊を屠って、その血をテントの入り口に塗り、旅の無事を祈る習慣があったようです。そしてまた、農耕民の生活においては、大麦の取入れが始まるので、その前に、家の中から酵母菌をなくしてしまって、新しく取り入れる大麦が酵母菌で発酵して、ダメにならないようにする、収穫開始のお祭りがありました。

この二つの伝統が、モーセの出エジプトの物語と一緒になって、エジプトの最後の夜に、各家庭の最初の子どもが殺される出来事、また、急な旅立ちのために、パンを発酵させる暇がなくて、種入れぬパンで食事をした話に結びつくのです。

その過ぎ越しの祭りから、５０日過ぎて、大麦に続き、小麦の収穫も終っての感謝の祭りが、この今日の使徒書は、この５０日目の祭り、五旬祭ということになります。これは、５０日目の安息日を加えての計算なので、その１日を引いて、旧約聖書では、七週祭という言い方をしますが、新約聖書のギリシャ語では、５０を意味するペンテコステという言い方になったのです。

日本では、今は田植えの季節ですが、以前熊本に居た時、小国の集まりに出かける途中で、阿蘇でも田植えが始まっていましたが、それと一緒に、小麦の穂が揃って、刈り入れを待っているような景色を、見たことがあります。五旬祭である小麦の取り入れの季節なんだなあ、と思われたことでした。さて、これと旧約の歴史との関係ですが、ユダヤ人たちは、この日をモーセが、シナイ山で、神様から「十戒を授与された日」、ということで祝っています。エジプトを脱出して、５０日目にはシナイ山で戒めを戴いて、順調な滑り出しだったのでしょう。しかし、その後は、４０年荒野をさまようのです。

その後、約束の地に入ると、春の大麦や小麦の収穫だけでなく、秋には、ブドウ、いちじくなどの収穫を祝うことも定着し、秋分の日に近い満月の日から１週間、取り入れの祭りを行うことになりました。取り入れの時には、家から畑まで通う時間も惜しい、ということや、収穫を盗む者を見張る目的で、畑に仮小屋を建てて、そこで番をしながら、歌って祝った、というのが始まりのようですが、その仮小屋は、昔、エジプトを出てから、カナンに定着するまで、先祖たちがテント生活をしていたことを思い出すためだ、というように教えられていました。「仮庵の祭り」と呼んでいます。

このように、ユダヤ人たちは、春に２回、そして秋に１回の収穫のお祝いをしていました。そして、そのほかに、１２月２５日には、イエス様が生まれるより、１６０年くらい前ですが、ユダヤの国が、北のシリアという国の植民地になっていましたが、そこの王様、アンティオコス・エピファネスが、エルサレムの神殿に異教の神様を持ち込んだり、ユダヤ教の神殿のものを奪ったりしたことに対して、ユダヤ人たちが反乱を起こして、ついにシリアから独立し、神殿を清める、という出来事がありました。これを「ハヌカー祭」（神殿奉献記念祭）と言い、ヨハネ１０章に出てきます。ハヌカーとは、奉献という意味で、一度汚された神殿を清めて、もう一度神様に奉献したことから、そのように言われます。

さて、これまで、ユダヤ教のお祭りについて、話してきましたが、私たち、教会のお祭りと日程が良く似ていることに、お気づきだろうと思います。

ユダヤ教の過ぎ越しの祭りは、イエス様の受難と復活と時期が重なります。イースターの季節ですね。また、五旬祭で、モーセが律法を授かったお祭りに対応して、私たちは教会を導く、聖霊が降ったことを祝っています。そして、もう一つのはずですが、これは、ちょっと重なりません。ユダヤ教の秋の取り入れ、仮庵の祭に対応するのは、キリスト教では、収穫感謝祭ということになります。ただ、面白いのは、ユダヤ教では、９月の秋分の日前後に行われる仮庵の祭りが、ユダヤ教の一年の最後にあたり、その後は新年が来るのですが、それと同じように、１１月の終わりの収穫感謝祭の後、私たちは、降臨節を迎えて、新しい一年を始めることになるわけです。

そして、ユダヤ教の神殿奉献記念祭であるハヌカー祭に、わたしたちは、イエス様の誕生を祝うことになっているわけです。同じように聖書を読んで生活しているユダヤ教とキリスト教は、お祝いも似たような日程に、別の祝いを行っているということですね。

さて、今日は、お祭りの話を長々と説明してしまいましたので、今日の聖書、特に使徒言行録から学ばなければならないことが、後回しになってしまいました。

今日の使徒言行録の出来事は、そのまま読めば、大変な奇跡物語です。イエス様の弟子たちのほとんどは、イスラエルの北部、ガリラヤ出身で、遠い外国の言葉なんか知っているはずがありません。ところが、この五旬祭のために、つまりモーセがシナイ山で十戒を授かったのを記念して、小麦の収穫祭のために、世界各地から来ている人々が、みんな生まれ故郷の言葉で弟子たちが語っているのを耳にした、というのです。そして、これは聖霊が天から降ってきて、それを起こしたんだ、とルカは書き残しているのです。

もし、これが表現されているとおりの、そのままのことが起こったなら、もう私たちは高いお金を払って、英会話教室なんかに行く必要はなくなります。

しかし、注解書などを読みますと、わたしたちをがっかりさせるようなことが書かれていました。

この祭りに集まった人々は、そのほとんどがユダヤ人あるいは、ユダヤ教に改宗した人々です。当時の人々は、ユダヤ人が母国語として話しているヘブライ語（正式には、アラム語という言葉なのですが、新約聖書では、この言葉がヘブライ語と紹介されている）とギリシャ語を話していたようです。ですから、沢山の出身地の名前が出てきますが、実際は、この二つの言葉があれば、みんなその話している内容を理解できたらしいのです。

それじゃ、どうして、この書物を書いたルカは、それを奇跡のように表現したのでしょうか。

このルカは、直接この現象を目撃したわけではありません。彼自身は、このあとクリスチャンを迫害し

ていたのに、回心してキリスト教の伝道者になったパウロという人の弟子です。しかも、外国人。
実際、この時、弟子たちの何人かは、聖霊に満たされ、異言を語っていたのではないか、と思われるのです。異言を語る人は、恍惚状態になって、誰にも理解できない言葉を次次に話し始めていたのです。これを話すことについては、パウロはちょっと注意して、教会では異言で一万の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方を取ります。と言っています。「教会全体が一緒に集まり、皆が異言を語っているところへ、教会に来て間もない人か信者でない人が入って来たら、あなたがたのことを気が変だとは言わないでしょうか。」と、危険性を語っています。

今日の使徒言行録は、１１節で終っています。人々の驚きの言葉で終っているのですが、それに続く部分、１２節１３節では、

人々は皆驚き、とまどい、「いったいこれはどういうことなのだろうか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

ですから、弟子たちの何人かはギリシャ語で、エルサレムに集まった人々に語りかけたのではないか、と思います。ヘブライ語しか理解できない人々には、弟子たちの発言が、異言のように思えたのでしょう。しかし、異邦人であるルカの立場からすれば、弟子たちが、自分たちに理解できることばで、イエス様の話を語ったんだ、ということではないか、と思うのです。

奇跡物語の場合、それを受け止めるのには、３つの立場があります。

一つは、そんなことは全く起こらなかった、作り話だ、という立場。これでは全く奇跡物語は無意味なものになってしまいます。

もう一つは、全くその通りのことが起こった、という立場。これなら、奇跡に意味があるのですが、科学的には、説明できず、受け入れられない立場、ということになります。

そして、三つ目の立場ですが、それは、その言葉のままのことが起こったわけではないが、そのように表現することで、なにか別の大切なことをたとえている、ということです。

この五旬祭の日、世界中から集まった種々雑多な人々は、一生のうちではじめて、自分たちに理解できて、まっすぐ心に入ってくるやり方で、弟子たちの口から、神様の偉大な業の話を聞いた、ということではないか、と思うのです。

現代において、私たちは、昔の人々に理解できた古い聖書の言葉を、何とか、すっと心に入る、分かりやすい言葉で、語る、ということはできないか、それを今、教会は求められている。それが出来るとき、本当の意味で、聖霊が私たちの上に働いている、ということになろうと思います。